大学出版

2003.3 No.56 春

大学と社会を結ぶ知のネットワーク

フォトグラファーの四季――春 ■ 堀口マモル ――表2

特集＊大学出版部の機能・再考

大学出版部協会の歴史的展開 ■ 渡辺勲 ――2

メディアとしての「二十世紀大学出版部」 ■ 長谷川一 ――6

大学の知的財産を社会に還元する出版活動 ■ 小林哲夫 ――10

「集約点」としての英文出版 ■ 鈴木哲也 ――14

科学する目 9 住居の変化と家庭害虫 ■ 青木淳一 ――18

歩く・見る・聞く 知のネットワーク 29 日本民藝館 ――20

大学出版部ニュース ――22

AJUPオピニオン ――32

大学出版部協会

THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES

ミラノ地下鉄の定期券

フォトグラファーの四季

春 Primavera

1/8秒との出会い

堀口 マモル

マンハッタンにスタジオを構え、広告写真家を生業（なりわい）にしていたころ、本当に撮りたい写真と、日々の糧を得るために撮影している写真との違いに戸惑いを感じていました。

本当に撮りたい写真とは何か？　なぜ自分は写真を撮っているのか？　悶々とする日々に耐え切れず、一九八六年三月、活動の拠点を替えることを決意。当時なんとなく惹かれていたミラノを選びました。まずはパリまで行き、そこから夜行列車で早朝ミラノ駅に到着。しかしホテルを探そうにも、英語は通じないわ、荷物が多くて動きにくいわ…。途方に暮れていた所、運良く英語のしゃべれるインド人に助けられ、ホテルを紹介してもらい、三日後には駅近くにアパートを借りる事ができました。入居して落ち着けると思ったのも束の間、音もなく静まり返った部屋に耐えきれなくなり、まだ右も左もわからない街を一人で夜遅くまで歩き回ったものでした（ちなみに、最初に購入した家電は、いうまでもなくテレビでした…）。しかし、しばらく続いたそんな生活が、写真家としての感性を磨くのに貴重な時間であったのも事実です。

ミラノの生活も二ヶ月を過ぎたころ、知人の紹介でイラストレーターの矢島功さんにお会いしました。そしてこの出会いこそが、その後の写真人生に大きく影響を与えたのです。

後にニューヨークに戻ってからのこと。彼の依頼で『モード・ドローイング・ヌード』という本の写真を担当させて頂き、それが、現在も私のライフワークとして続けているシリーズ〝1/8秒の瞬間〟の始まりでした。通常は、動いているダンサーを〝瞬間〟でとらえるために高速シャッターで撮影するところを、八分の一秒というスローなシャッタースピードにして撮影。動きもブレも残像として写真に焼きつける事により、肉体の持つ力強さを表現しました。それまでにも〝ブレ〟という手法を用いてはいたのですが、それらの作品をイタリアの出版社に持っていくと、「これはファッション写真ではなく、アートだ」と言われる事がしばしば。そこで「自由に撮っていいよ」といわれたこの本で表現してみたのです（二年後には、ファッション業界でも、この手法はもてはやされることになるのですが…）。本当に表現したいこと、なぜ写真を撮っているかを探し求める旅は、この時やっと始まったのです。

その後、1/8秒の瞬間は、日本にいたころから憧れていた写真専門雑誌「フランス・ズーム」に特集され、アメリカを始め、イタリア、フランス、スイス、ベルギー、スペイン、香港、台湾、そして日本での写真展へと展開していったのです。（ホリグチ・マモル／写真家）

・・・

特集

大学出版部の機能・再考

大学出版部協会に加盟している大学出版部は二〇〇三年の三月現在二六。そのうちのどれ一つとして、同じもの、似ているものはないと言っていいでしょう。それぞれの大学に建学の精神があるように、それぞれの大学出版部は、大学ごとに異なる期待を背負って設立されています。しかし、その大学本体が激変しているいま、大学出版部もまた、大学に対して改めて己れの機能、存在意義を提案する必要が生じてくるかもしれません。

本特集では〝大学出版部協会のありかたの歴史的な展開〟〝メディア史的な視点からみた大学出版部〟から、大学出版部がいままで何を担ってきたかを歴史的にとらえなおしつつ、一方で〝いま大学が大学出版部に求めるものはなにか〟、そして〝英文出版による世界への情報発信の可能性〟という切り口から、大学出版部の今後のありようを考える糸口を探ってみたいと思います。

大学出版部協会の歴史的展開

渡辺　勲（大学出版部協会幹事長・東京大学出版会）

大学出版部協会（以下、協会と略す）は、いま変わろうとしている。この小文の主題はもともと「では、どのように変わるべきか」を考えることであった。そのためには「協会のいま」を確認することが前提的作業となる、と考えた筆者は、対象の二つの足場である大学と出版界を視点に据えた歴史分析と環境分析を、まず試みようとした。しかし誠に遺憾ながら、もっぱら筆者の力不足のために「前提的作業」すら十分に果たせないまま与えられた紙幅を費消してしまった。何卒お許しいただきたい。続編の機会を得て、必ず当初の目標に再挑戦したいと思う。

＊　以後とくに断らない限り、出版界関連の諸数値は出版科学研究所編『年報』によった。また高等教育に関する記述は全面的に天野郁夫先生の諸著作に依存している。小文の性格から細かい注記を省いたことを、先生と読者の方々にお詫び申し上げお許しいただきたく思う。なお先生の最新作『日本の高等教育システム』（東京大学出版会、二月刊）は感動的な労作である。強く推奨させていただく。

大学出版部協会の創立

協会は一九六三年六月十一日、八大学出版部と二学術文化団体を糾合して誕生した。『大学出版部協会35年の歩み［年表］』（以下、『年表』と略称）の、創立時の記録は充実している。ところが創立直後から協会は事実上の休眠状態に陥ったのか、協会活動らしい記事はなく、すぐに「一九六七～七〇年の間は、大学紛争の影響残り協会の活動もほぼ停止する。」につながる。創立後約七年間の協会は、存在すれども姿は見えず、の状態だったと推測されるのだ。しかし協会創立時を含む一九六〇年代は実に興味深い時代だった。「何故この時期に協会は成立したか」を解く鍵も、第一次安保後の高度成長のただ中で新幹線が走り始め、高速道路網が東京を変え国土を踏み拉きながら拡大し、東京オリンピックに国民が酔いしれ、大学進学率が六〇年一〇・三％、六五年一七・〇％、七〇年二三・六％へと膨張していった（エリート大学の急激なマス化と学生数の激増）、正

にこの時代の諸矛盾の中にあったはずだ。そして大学が孕んだ矛盾は複合化し、一旦はいくつかのタイプの大学紛争として激発する。

さて、出版業界の一九六〇年代を「書籍」の量的拡大の面から一瞥してみると、六〇年平均価格二五九円が七〇年には五二九円（二〇四％、物価上昇）、販売部数一四六〇一万冊が四七一五九万冊（三二三％、市場拡大）、そして販売金額は何と三七四億円から二二四六億円（六〇〇％）へと、驚異的な伸びを見せている。物価上昇もさることながら、それ以上に書籍市場の拡大が激烈だったことが分かる。この現象の背景にエリートからマスへの大学の変化・拡大が存在したことはまず間違いないだろう。そして、協会もまたこのような二つの要因に支えられて誕生し、発展期としての七〇年代を準備することが出来たのである。

成長型環境変化と協会の「発展」

八大学出版部で出発した協会（二学術文化団体は退会）は一九七〇年代に新たに六大学出版部を加え、一四大学出版部を擁する出版界でもそれなりに存在感のある一業界団体へと発展した。さらに『年表』によると、七二年「初めての共同目録」（営業部会活動の嚆矢）が出現し、七三年「第一回研修会」スタート、七七年「第一回編集部会」開催、となる。つまり七〇年代は今日に至る協会活動の原型を創造しその内容を充実させた時期でもあった。まとめて言えば、協会はこの期に「質的成長を伴う量的拡大を実現した」のである。

出版界に目を転じると、この一〇年間が業界秩序の再編期であったことが窺える。にも拘らず狂乱物価や円高不況等で不安定な経済状況が続く中、書籍販売金額七一／八〇年比二七八％に象徴されるように市場は拡大の一途をたどり、その故にと言えるに違いないが、克服すべき課題を先送りする癖を体質化したのも、この時期だったと思われる。

高等教育システムが急激な規模拡大をみせるのも、この時期である。七〇年に二三・六％だった大学等進学率は七五年三八・四％、八〇年には四七・二％に達して、以後ほぼこの水準に高止まる。一方で一八歳人口は八〇年代一六〇万台へと増え続けていたから、大学生実数のこの時期の増加振りは並みのことではなかった。この傾向は実は、九二年一八歳人口のピーク二〇五万に向かって、八〇年代いっぱい継続する。

大学生の希少性は既に六〇年代に失われていたが、この時期には大学はマス化を超えてユニバーサル段階（高等教育と社会との境界がほとんどなくなる）へと移行しつつあった。その担い手はマス化同様もっぱら私立大学で、急増し続ける学生数の約九割を吸収したという。必然的に私学助成規模は拡大し、合法的「水増し定員」は恒常化したが、問題意識を含めて旧態を依然とした国立大学の「現場」はもとより、高等教育システムの質的転換は生まれなかった。

実験大学・筑波の登場（七七年）も既存秩序にインパクトを与えず、課題は、ここでも先送りされたのである。

協会活動の成熟と変化の予兆

一九八〇年四月十二日「新入生を上回る三千九百人！父母つき東大入学式」（読・夕）、「ママの入学式？」（毎・夕）、こんな記事が「同伴父母人数は史上最高」との解説付で紙面を飾った。高度成長期の企業戦士の子供たちが、四七・二％という進学率を背景に偏差値型受験戦争に勝利して続々と大学へ送り込まれてきた。「大学紛争」経験世代とは異質な学生群の出現である。余談めいたこの話には「いま・二〇〇三年」を考える上で多少の意味がある。この時期に登場した学生たちがいまの日本社会の中核世代でありその親たちが高齢社会の中核を形成し始めているという、この事実である。

さて七〇年代を通じて諸矛盾の臨界点に達しつつあった「大学」の八〇年代は、九〇年代に待ち受けていた激動＝変革に見舞われることこそなかったが、その前提は文部省主導の審議会等で着々と準備され始めており、多くの大学人はそのことを意識していた。その内容を強引にまとめれば、量的処理は私学セクターに、国立セクターは質的充実、を基本に置いて、「①開かれた高等教育機関の整備、②高等教育機関の国際化、③特色ある高等教育機関の整備」を推進する、というものであった（紙幅上具体的に記せない）。

出版界の八〇年代はどうだったか。統計数値上（書籍部門、八一／九〇年比）は、販売金額一二六％、出版点数一三二％、発行部数一一九％、平均価格一〇三％、だった。これだけのデータからでも、書籍を取巻く環境変化を読み取ることが出来る。

「活字離れ」現象に対する様々な語りが横行し、「最近の学生さん」が嘆きの対象になった。しかし土地バブルを伴ってはいるものの低成長を基調とした八〇年代にあって、この業界はまだ成長している、と思われていた。「不況に強い出版業」という謬見にかなりの出版人が毒され、業界内危機の進行（それは流通問題に集約される）を結果として放置した。八〇年六月書協総会で当時の理事長は「業界の総論的な問題――版元と取次と日書連などが話し合って物事の骨格を決める――という総論の解決の時代は一段落した……。流通改善の問題にしても、……これからはむしろ個別的、各論的時代ではないか、……個別的な解決が積み重なっていって、総合的な出版界の骨格がより強固になり、前進する時代」と述べたという（『書協三十年史』二五四頁）。かくて、いまに至るも業界最大の課題は、あらゆる意味で多様な個別版元の自助努力に委ねられたのである。

協会活動にとっての八〇年代を、あえて一言で表現するなら、それは「成熟期」とすることが許されよう。執行機関としての幹事会機能が整備され、韓国大学出版部協会、中国大学出版社協会との、個別的交流が始まり、八六年四

月には『大学出版』第一号の発刊を見た。八三年・八八年には協会創立二〇周年・二五周年記念事業が、記念ブックフェアの全国展開を伴って盛大に執り行われ、協会の存在感は内外を問わず、かなりの高まりを見せた。八八年六月には早くも、編集・営業合同研修会で「電子出版について」（植村八潮氏）議論されている。新会員は四大学出版部と必ずしも多くはなかったが、これには大学における「変化の予兆」を勘案すれば首肯できる。むしろ協会は、成熟に伴う新たな問題を意識化しなければならなかったのだが…。

「その他の時代」の協会活動

歴史の後知恵的物言いになることをお許し願いたいのだが、九〇年代は「失われた十年」というよりも、事柄の本質からすれば、事実上の決着は既に着いていた、という意味で「その他の時代」ではなかったか。大学（高等教育システム）を直撃した九一年「大学設置基準の大綱化」、独立大学院構想等も八〇年代に準備を終えていたのではないか。確かに、形の変化から質の変化へ、そして露骨な「評価の時代」の開始ではあったが、これらも、九二年一八歳人口二〇五万が二〇一〇年一二二万へと激減することがはるか以前より予測されていたことを思えば、ある種の諦念は伴うものの、必然の道ではなかったか。もちろん今日に直結している九〇年代を、だからといって軽視することは誤りである。むしろ大学人には事態への創造的対応を、期待しなければならなかった。九〇年代以降この数年における、新たな大学出版部作り状況も、これらのこととどこかでリンクしているに違いないし、大学の未来と大学出版部の未来は、本質的に重なっているのである。

いわゆるバブル崩壊後の出版界を、トータルに語ろうとしても無理である。再販制ひとつとっても統一した像は浮かばない。流通問題の矛盾の蓄積は鈴木書店を倒産に追い込んだが、出口は全く見えてこない。過剰新刊ラッシュと個別版元の自転車操業型自助努力に支えられていたこの業界の「成長」も、止まって落ち始めるともう元には戻れない。創造的で本質的な変化を作れなくなった業界にとって、この十年はやはり「その他」でしかない。出版業としての大学出版部の苦悩も出版界のそれと重ならざるを得ない。

このような状況を背景に九〇年代協会活動は、新たに八大学出版部を加えて現在に至り、八〇年代に到達した活動水準に、九七年開始の日本・韓国・中国三カ国合同セミナー等を加えて発展してきた、と一応は言うことが出来る。しかし、成熟と発展を支えてきた担い手たちは、協会創立期と比べるまでもなく、この十年程で大変化を遂げていた。九二年に協会会則等を見直し、また協会法人化を目指しての取り組みが、間欠的にもせよ行われたのは、予想される新しい事態に備えての試行の芽だったが、しかしこの芽を育てる仕事は、二一世紀へと持ち越されることになったのである。（未完）

メディアとしての「二十世紀大学出版部」

長谷川　一
（東京大学大学院情報学環・学際情報学府博士課程／メディア論・出版論）

ひとりの男について語ることから始めよう。かれの名はジョージ・パームリー・デイ。今日その名を知るひとは、かれの活躍したアメリカ合衆国ですらごく限られる。だが、百年前を生きたこの無名の人物はまさにいま召還されなければならない。なぜならデイこそは「二十世紀大学出版部」というメディアを枠づけてきた「アメリカ・モデル」の構築に中心的な役割をはたした人物だったからである。デイという証人をとおし「アメリカ・モデル」形成過程に歴史社会的まなざしを向けてみよう。文化の社会学は歴史的でなければならないとはレイモンド・ウィリアムズの至言である。[1] メディアの歴史的探求は、つねに現在のメディア状況に示唆をもたらしてくれるに違いない。

「アメリカ・モデル」「アメリカ・モデル」の特徴を、「中世以来」のイギリスにおけるそれと対比させて三点にまとめたのは箕輪成男である。[2] ①「イギリス・モデル」の大学出版部は商業出版社と競合。「アメリカ・モデル」はモノグラフを主に研究者を対象に刊行。商業出版社とは棲みわける。②「イギリス・モデル」では聖書など広汎な読者層をもつ書物によって利益をあげる。「アメリカ・モデル」では赤字は折り込みずみであり、母体大学や種々の補助金による補填が前提。③「イギリス・モデル」では印刷機能が主体であるのにたいし、「アメリカ・モデル」では出版機能が主体。

断っておくが、伝統的な「イギリス・モデル」が近代的な「アメリカ・モデル」へと発展したというような素朴な発展史観は、本稿では採用しない。あらゆる社会的制度と同様に、大学出版部の歴史は、それがあらかじめ内包していた理想像を徐々に発現させてきた過程と捉える本質主義的な立場から把握されるべきではない。そうではなく、「アメリカ・モデル」とは、「モデル」という表現が端的に示すように、つねに言説のレベルにおいてひとつの「規範」として機能してきた事実に留意する必要がある。「アメリ

カ・モデル」とは大学出版部というメディアの唯一の近代的様態なのではなく、特定の社会的・文化的諸条件のなかでありえたさまざまな可能性のなかから、結果的に選択されたひとつの姿にすぎないのだ。本稿では②を中心にその形成過程を見ていこう。[3]

デイとイエール大学出版局　デイは一八九七年にイエール大学を卒業したあと、ニューヨークで実業家として活躍していた。一九〇七年、デイは同じイエール卒業生である友人二人と語らって、出版のための非営利団体、イエール出版協会（パブリシング・アソシエイション）を設立し、『イエール同窓会週報』『イエール・レヴュー』といった定期刊行物を発行しはじめた。翌〇八年、デイはイエール大学にたいし、大学理事会の出版委員会によって監督される非営利法人という形で、イエール大学出版局（ユニヴァーシティ・プレス）を設けることを提案し、許可をとりつけた。[4] デイは資本金や運転資金など二五万ドル近くもの大金を出資するとともに、みずから代表に収まることになった。[5]

デイはものごとの草創期にしばしば現れる多面的な才能をもつ人物だった。イエールの大学出版局をほとんど独力で創設するだけのヴィジョンと実行力があった。大学にその地位を認めさせるにあたってはタフな政治力を発揮し、海のものとも山のものともつかぬ大学出版局の経営を一手に引き受けるだけの度量と、それを切り盛りしていくだけの財政的手腕の持主でもあった。大学出版局は、一九一〇年に大学の一部局として正式に編入されたのだが、[6] 同時に大学はデイを大学本体の収入役に抜擢したほどだった。[7]

デイはみずからの大学出版局について二冊の著作『イエールにおける出版の新時代』（一九一四）と『大学出版部の役割と組織』（一九一五）を遺している。[8] 大学関係者に向かってなされた講演が基になっていると推察されるこれらの小さな書物のなかで、デイはくり返し、大学にとって大学出版部がいかに有用であるかを説いている。

ⓐ正統性。デイは二つの側面からかれの大学出版局を正統づける。ひとつは、ベンジャミン・シリマンやヘンリー・W・ファーナムといった、イエールにおける出版の先行者たちの系譜上にあるという点。いまひとつは、大学における出版部の歴史的先例の存在である。ここでは、そもそも大学出版部とはイギリスのオックスフォードとケンブリッジ両大学において長い歴史をもつ由緒ある存在であるという点が強調される。アメリカにおける大学出版部はイエールのような伝統ある大学ではいまだ成功していないことをデイは抜かりなく指摘している。

ⓑデイは、大学出版部が大学の内部に、組織的にも財政的にも明確に位置づけられるべきであると主張している。大学出版部は、本来的に大学に奉仕すべき存在である。出発時点においてはたしかに個人によるベンチャーとして出発したが、大学における出版事業を継続させるならば、近い将来、出版のための十分な基金に支えられた大学の内部組織として活動できるようになるべきである。大学とは独

立した外郭組織とするよりも、大学の一部局とするほうが望ましい。ただし実際の運営にはビジネスのトレーニングを積んだ卒業生があたるのが適当であろう。伝統ある大学では出版は外部の既存商業出版ルートに依存してきた。だが商業出版社が今後もこうした学術的な出版に関心を保ちつづけるかどうかは保証の限りではない。

ⓒ大学にとって大学出版部には大きな効用がある、とデイは説く。母体大学は教員たちの研究成果をモノグラフとして商業出版ルートよりも迅速に出版することができる。教員は業績がより速やかに認められ、より有利な昇任機会が獲得できる。さらに大学出版局の活動は大学外部に向かってなされるが、同時に大学自体の名前のアピールにつながる。しかも、多額の経費のかかる通常の方法よりもずっと有利かつ広汎に宣伝できる。「大学出版部とは誰も読まない本を出版する組織である」という古くからの戯れ言があるが、イエールの出版物は違う。最先端の学者だけでなく広く文化人の関心を満たすものであるからだ。

ⓓこうしてデイは肝心の主題、すなわち大学からの経済的支援の拡充を訴える。かように大学にとって効用大なる存在である大学出版部は、しかしその継続的活動のためには、大学による財政支援が不可欠であり、大学はそのための予算を用意すべきである。残念ながらイエールはいまだ十分な出版のための基金を設立してはいない。「もしイエールが『明知と真理』に与するのなら、明知と真理の普及にも与しなければならない」のだ。

大学出版部は、大学の一部門としての制度的地位が保証されるべきである。むろん大学から継続的な財政的支援を受けなくてはならない。その一方で、大学から一定の独立性が保たれる必要がある。――相矛盾するこれら諸要件を、「明知と真理の普及」という錦の御旗の下に統一的にまとめあげたのが、デイの論理の真骨頂である。

「二十世紀大学出版部」の立つ地層　重要なのは、デイの主張をドグマとして捉えることではない。そうではなく、こうしたデイの論理構築が成立している地層を読み解くことである。結論からいえば、それは、アメリカの大学が紳士教育を中心にした十九世紀までの植民地大学的なあり方から、ドイツに範をとる研究至上主義の近代大学の影響を受けて大きく変容を遂げつつあった時代状況を的確に読みとり、そのなかに大学出版部を位置づけることをもって安定的な地位を確保しようと企図したものだった。

デイの関心がつねに大学に向けられているのは、けっして偶然ではない。デイが大学出版部の有意義性を大学に諄々と説くのは、大学内における大学出版部の位置づけをより明確に、より有利にするためでもあるからだ。「明知と真理の普及」に奉仕する存在としての大学出版部というデイの論理は、一九四〇年代までにモノグラフ出版社というもうひとつの柱を確立して「アメリカ・モデル」としての完成を見る。それは現在にいたるまで一世紀近くにわたって、

アメリカ（およびその影響を受けた世界各地）における大学出版部の存在を社会的・文化的に根拠づける「規範」として機能することになった。近代の学術出版において、近代大学におけるフンボルト理念に比肩しうる影響力をもったといって過言ではない。

「原点回帰論」を越えて　ところで、大学出版部が困難に直面しているといわれる今日、しばしば「原点回帰」論が唱えられる。たとえば、いまこそ専門書出版へ立ち返れ、などというように。しかしそのときその「原点」なるものの妥当性が問われることは稀である。「原点」とは、あらかじめ「原点」として時間軸上に中立的におかれているのではなく、つねに後のある時点から遡及的に「原点」として設定される。その意味で、いかなる「原点」も、それを「原点」たらしめているパースペクティヴに媒介されてしか存立しえない。大学出版部の歴史に即していうならば、「アメリカ・モデル」を大学出版の「原点」として規範化するまなざし自体が問われなければならない。

「アメリカ・モデル」では、近代大学を中心とした近代知の布置が安定的に展開することが前提にされている。だが今日経験されていることは、まさにその急速かつ全域的な変容――崩壊とまではいわずとも――である。今日いわれる大学出版部の転換点とは、われわれの投げ込まれている現在の世界を読みほぐし、それを編みなおしていかなければならない契機であるということだ。二十一世紀の今日デイが現れたとしたら、かれは間違いなく、「アメリカ・モデル」を柔軟自在に読み替えて「二十一世紀大学出版部」という新しいメディアを構想しようとするだろう。

大学の変化を後追いするばかりが道ではない。大学出版部が新たな知の地平を拓くことに先導的な役割をはたしていく。そうしたことがもっと考えられてもよいのではあるまいか。たとえそれが、いま現在われわれの抱く「大学出版部」のイメージとかけ離れたものになるかもしれないのだとしても。

（1）レイモンド・ウィリアムズ『文化とは』小池民男訳、晶文社、一九八五年。

（2）箕輪成男『歴史としての出版』弓立社、一九八三年、一二七―一三一頁。同じく『世界大百科』（平凡社）の項目「大学出版部」。

（3）詳しい議論は以下を参照されたい。拙著『出版と知のメディア論――エディターシップの歴史と再生』みすず書房、二〇〇三年近刊。

（4）G・R・ホウズ『大学出版部――科学のために』箕輪成男訳、東京大学出版会、一九六九年、六九―七〇頁。

（5）Tebbel, John William, *A History of Book Publishing in the United States, Vol. II, The Expansion for the Industry 1865-1919*, New York: R. R. Bowker Co., 1975, p. 539.

（6）Kerr, Chester, *A Report on American University Presses*, The Association of American University Presses, 1949, pp. 20-21.

（7）Kelley, Brooks Mather, *Yale: A History*, New Haven: Yale University Press, 1974, p. 324.

（8）Day, George Parmly, *The New Era of Publishing at Yale*, New Haven: Yale University Press, 1914; *The Function and Organization of University Presses*, New Haven: Yale University Press, 1915. 煩雑を避けるためデイの著作の出典頁を示さない。

大学の知的財産を社会に還元する出版活動

小林　哲夫（朝日新聞社出版本部大学ランキング編集部）

小柴昌俊さん、田中耕一さんのノーベル賞受賞が決まってからすぐに、彼らの手記刊行をめぐって水面下で争奪戦がおこった。小柴さん、田中さんをいかにくどき落とすか、わたくしも編集者として、この「戦い」に参加してみたかった。出版にかける熱意がノーベル賞科学者に通じて、彼らから担当編集者として「ご指名」を受ける。これは、編集者としての能力を高く評価されたと受け止めていいだろう。編集者冥利に尽きるというものだ。

一般読者向け啓蒙書（入門書）として、小柴さんは講談社ブルーバックス、朝日選書を出している。田中さんはまだ著書はないが、『文藝春秋』誌で日記を連載しており、おそらくこれが本にまとめられることになるだろう。老舗の大手出版社のブランド力か、優秀な編集者のなせるわざなのか。いずれにしても、編集者は彼らの本を出すべく、勝負に出るべきである。知名度が高くない出版社でも、果敢にチャレンジしてほしいものだ。

小柴さん、田中さんはアカデミズムの世界の人たちである。研究者であり、大学との縁も深い。ならば、大学出版部も彼らの手記争奪戦に積極的に参加してもいいのではないだろうか。小柴さんが勤めた東京大学、東海大学。そして、田中さんが卒業した東北大学。これら大学の出版部こそがノーベル賞受賞者の著書を出すのにもっともふさわしい。いや、責務ともいえないだろうか。

大学出版部が所属（していた）大学のノーベル賞受賞者の著書を世に問うこと。ここに、大学出版部が果たすべき役割が象徴されているとわたしは思う。なぜならば、アカデミズムと一般大衆をつなぐ媒体としての大きな役割が、他の出版社より求められているからだ。小柴さんのスーパーカミオカンデ、田中さんのタンパク質の質量測定法をわかりやすく解説する媒体として、出版会（出版部）の前に冠としてかぶせられた「〇〇大学」というブランド力がもっといかされていい。

ここで、わたしなりに大学出版部の役割を考えてみたい。どんな出版物が求められるか、個人的な希望をまじえて次のようにまとめてみた。①古典となるような基礎文献、②最新の学問テーマのわかりやすい解説、③大学で使われる教材、④受験生向きの大学情報(教育、研究内容)紹介、⑤企業など一般社会向け大学情報、⑥高校生が読む教養書。

「わが大学はこう考える」を本にまとめる

①古典となるような基礎文献。これの定義はむずかしいが、基礎的な理論や公式が掲載されている文献、特定の主義主張をまとめたもので引用度が高い文献ということができるだろう。たとえば、『一般言語学講義』(ソシュール、岩波書店)、『哲学史講義』(ヘーゲル、河出書房新社)などのように、どうしても翻訳物が多くなるが、所属する大学の研究者から最新の基礎文献に関する情報を提供してもらい、ぜひ、翻訳刊行を考えていただきたい。『ジェンダー・トラブル』(ジュディス・バトラー、青土社)、『利己的な遺伝子』(リチャード・ドーキンス、紀伊國屋書店)、『社会学の社会学』(ピエール・ブルデュー、藤原書店)あたりは、大学出版部から刊行してほしかった。

②最新の学問テーマのわかりやすい解説。二〇〇一〜〇二年にかけて、大学教員が著した本が相次いでベストセラーになった。〇一年同時多発テロ以降、イスラムへの関心の高まりが売り上げに結びついた『現代イスラムの潮流』(宮田律、集英社)、日本語ブームの火付け役ともういうべき『声に出して読みたい日本語』(草思社、齋藤孝)である。いずれも、研究者としての専門性がいかされたテーマであり、大学出版部が出してもおかしくない内容である。

大学出版部編集者はどこよりも早く研究者の最新業績を知ることができ、彼らに対してもアクセスしやすい立場にある。大学でおもしろそうな研究を進めていたり、熱心に社会活動を行っていたりする教員たちに関する情報をいち早くキャッチして世に問うことができるはずだ。

ところが、実際、大学出版部編集者、大学研究者双方に話を聞いても、「わが大学の最新テーマ、将来有望な若手研究者の独特な学説や見解を、わが出版会を通して社会に知らせてあげよう」という視点での情報交換があまりなされていないようだ。知的資源の有効活用がなされず、じつにもったいない話である。

朝鮮半島問題、アメリカのイラク攻撃、日本の不良債権問題、政治改革、教育政策……、大学のなかにはこれら諸問題を解きほぐす専門家は何人もいる。彼らの知識や政策提言について、なぜ、同じ大学の冠を戴く出版会が発信する媒体になろうとしないのか。たとえば、九・一一同時多発テロについて、総合大学であれば、政治学、宗教学、社会学、経済学、建築学(ビル崩壊の原因追究)などの分野の知恵を総動員して、一冊の本にまとめればいい。「〇〇大学はテロをこう考える」などのタイトルで。そのためには、

大学出版部の編集者は、読者になにが求められているのか、つまり、なにが売れるのかについて、徹底的にマーケティングすべきではないだろうか。

新書に対抗できる教養書を

③大学で使われる教材。毎年新学期を迎えると、大学生協などの書店では教科書販売コーナーが設置される。ここに並んでいる専門書、テキスト、サブノート類のなかには、大学出版部のものはそれほど多くない。教育に熱心な大学教員は、毎回、授業ごとにオリジナル教材を作るが、授業が終わると二度と陽の目を見ない場合が多い。一方で、試験前になると、講義ノートや教室での配布プリントが、多くの学生にコピーされる。ここに、大学出版部が参入する余地はないだろうか。単価が安い小冊子、あるいは、資料集でもいい。大学教員が授業に必要とする講義録に代わるもの、そして、学生が自習する上で役立つコンパクトにまとまったものを、作ってみたらどうだろうか。

④受験生向きの大学情報(教育、研究内容)紹介。大学の入試広報課には、受験生用パンフレットが山のように積まれている。それも装丁、印刷にかなりお金がかかったものだ。しかし、パンフレットを読んだだけでは、大学の教育、研究内容はなかなか伝わってこない。

大学受験の進路指導を担当する高校教諭はパンフレットに見られるような「大学がどれだけきれいに着飾っているか」ではなく、「大学でなにを学ぶことができ、学生にどのような価値が付加され、卒業後の進路はどうなのか」を知りたい。この一冊を読めば、大学の最新情報がわかるような本がほしい。販売戦略的にも、全国の高校に一冊おかれるようなその大学の年鑑刊行はそれほど大きな冒険ではないはずだ。とくに、学問紹介、教育内容、教員の活動を詳細に記した大学情報誌を、ぜひ作ってほしい。

⑤企業など一般社会向け大学情報。高校と同じで企業人事部に一冊おかれるような大学情報誌だ。就職課、就職指導担当教員、就職実績がある企業から、できる限りの情報(実務教育の内容、学生の資格取得状況、卒業生の企業での活躍など)を提供してもらい、大学と企業との情報ギャップを埋める役割を果たす。企業が求める学生、大学が自信を持って送り出せる学生――お互いのニーズに応えられるような情報を大学出版部はとりまとめたらどうだろうか。また、産学共同の成果、特許取得状況などの情報も積極的に公開してほしい。

⑥高校生が読む教養書。受験生から定番とされる受験参考書の執筆者は、以前は大学教員が圧倒的に多かったが、いまでは、予備校講師が大半を占めている。しかし、予備校講師が著した参考書は短時間に効率よく公式、年表を覚えるノウハウを伝授するものなどマニュアル色が強い。

しかし、大学入試の多様化がすすみ「人物」が重視されるなかで、論文や面接を課す大学が増えてきた。これに対

応できる知識、能力、とくに教養が受験生に求められるようになっている。そこで、受験生の知的好奇心を満たす教養書(啓蒙書)が必要になってくる。大学教員の出番だ。この市場を大学出版部はぜひ活用して、しっかりした教養書を作ってほしい。一週間〜一ヶ月で書き上げられてしまうような粗製濫造気味の新書の、教養と銘打ちながら週刊誌記事の寄せ集めのような内容に警鐘をならすためにも。

地域社会に役立つ本を作ってほしい

これまで述べてきたことは絵空事ではないか、との意見があるかもしれない。実際、大学出版部は大学とは別物の組織であることもあり、教員や事務職員との交流が十分に図れないこともあるだろう。たとえば、大学当局の広報予算が出版部にまわるようなシステムではなく財政的に厳しい、大学出版部職員が大学の定期人事で決まってしまいプロの編集者がいない——などの現実はあるだろう。それを承知でわたしはあえて主張したい。大学出版部が大学と読者をより綿密に結びつけるシステムを作らなければ、大学出版部ブランドが宝の持ち腐れになってしまうではないか、との思いからだ。

大学出版部が作るべき本はたくさんあると思う。たとえば、『大学自己評価報告書』。図体だけはでかいが、社会にはなにも役立っていないばかりか、大学内部でも無用の長物と思われがちである。しかし、その中身をつぶさに読むと、大学人のホンネが見え隠れして結構おもしろい。大学評価委員会から予算の都合をつけ、一般向けにコンパクトにまとめた自己評価本を出したらどうだろうか。高校の先生はパンフレットよりも大学の外部評価に関心がある。

また、「21世紀ＣＯＥ」に申請した研究テーマの内容を大学出版部はぜひまとめてほしい。大学がもっとも誇りとする研究を社会に公表するのは大学の義務だからだ。

最後に、わたしが大学出版部編集者だったらぜひ手がけてみたい本について記しておこう。二〇〇〇年三月に北海道有珠山が噴火したときに、北海道大学附属地震火山研究観測センター教授の岡田弘さんは、噴火の状況や今後の対策について刻一刻、記者会見で発表していた。岡田さんは噴火する前から地元の地域住民にとけ込んで避難訓練を行っていた。当時、わたしは、岡田さんの活動を見て、彼に有珠山についての基礎知識、噴火のシステム、避難の方法など一冊の本にまとめて書いてもらいたいと思った。地域の人々の役に立ち、社会から信頼される大学づくりに一役買うためにも、版元は大学出版部しかない。大学が地域社会のために役に立つ。その手伝いを大学出版部が担う——という役割が理想的なのではないだろうか。

「集約点」としての英文出版——我々は存在意義を示せるか

鈴木　哲也（京都大学学術出版会）

「インパクト・ファクター」としての大学出版部
——英文出版需要の背景

研究者にとって最大の栄誉は、その研究発表が広く評価されることである。しかも今の世の中、それは単なる誉れではなく、研究を続け得るか否かを左右するポストと研究費を保障するものだ。先般、21世紀ＣＯＥの採択・交付が発表されたが、一六七億円という巨額の国費を使って世界的な研究教育拠点を形成しようというプログラムも、その採択の基準は、それぞれのプロジェクトが世界的な評価に耐え得るか否かという点にある。

今日、学術研究を評価する方法として猛威をふるっているのが、Citation Index（論文引用度）である。この方法が普及し始めた当初、研究者達はしたたかにも「仲間内で論文を引用し合う」という手法で引用度を上げようとした。しかし「敵（？）もさるもの」、そうした姑息な手段は許さない、と「最新文献指数」やら「被引用半減期」などという評価指標が様々に編み出され、最後に出てきたのがImpact Factor（文献引用影響率）という指標である。手短に言えば、当該の研究領域に高い影響力を持つメディアに採択されたかどうか、ということだ。

数年前、私は、シリーズ研究書の出版を通じて懇意にしていただいている、ある京都大学附置研究所の所長に呼び出された。研究拠点形成の上では、世界に向けた成果公開が不可欠である。その点、京都大学学術出版会は、英文書の刊行に真剣に対応するつもりがあるのか。こちらの返事如何では叢書版元としての位置づけを見直すという含意も感じられた、いつになく厳しい問いかけであった。研究成果を相応しいメディアに発表することで、国際的な評価を求めたい。しかし、少数の例を除いて、日本から発信される権威ある英文専門誌はない。また、*Nature* や *Science* のような、世界的な影響力を持つ学術レビュー誌も日本には存在しない。そこで、大学出版部に「Impact Factor」

としての役割を求めたいが、京大に限らず、日本の大学出版部は英文出版を事実上等閑視してはいないか。[1] 研究者のいらだちがここにあるのだ。

何を出版するか——企画採択の要件

しかし、私たちにも言い分はある。英文書の刊行には特別なコストがかかる。まず、英文原稿を査読しそれにコメントできる編集者を必要とする。さらに英文の校閲は不可欠であり、これは英語を母国語とし、しかも語感に敏感な者でなければ務まらない。組版や印刷・製本のコストを下げる方法はいくらもあるが、こうした編集費用は決して削減できないのだ。しかも販売がこれまた大変である。日本には海外市場に本を送り出すシステムがほとんど存在しない。だいいち、世界中の研究者に案内を送るには、どうすればいいのだ？　確かに、英文出版を経済的に支援するシステムは、科学研究費を中心にして強化されつつある。しかし、企画から販売まで、出版社に相応しく仕事をするには、英文書出版は私たちにとって非常に負担が重いのだ。

それをあえて行おうとすれば、何を刊行すべきか、という基本から見直さねばならない。「これはなかなか優れた博士論文です」程度の評価では、とても企画化することはできないのだ。私たちが設けた企画採択の要件は、次のようなものである。

(1)　日本の学界が世界をリードしている、または世界的に見てユニークな一角を形成していることが明らかな領域にあって、高く評価されている研究。例えば、理論物理学、防災科学、生態学、霊長類学、地域研究等の分野の優れた研究。

(2)　その著者（または研究グループ）が世界をリードする、あるいは世界的に見てユニークな一角を形成している場合。例えば、仏文学におけるプルースト書誌研究等。

(3)　現在でも世界的に引用頻度の高い、古典的な業績。例えば数理生態学における内田俊郎の業績。

(4)　ロケーション的に日本でなければできない貴重な研究。例えば、日本（アジア）産生物の分類や生態・行動、日本文学、伝統芸術、日本史、日本の社会分析等の分野での優れた研究。ただし、できれば個別研究ではなく、グラン・セオリー的なものが相応しい。

もちろんそれ以外にも考えられようが、注意しなければならないのは、日本紹介、例えば伝統芸能等の分野なら海外で売れるかもしれないと考えて企画化するようなことは、避けるべきだということだ。海外での日本への関心は、かつてのように高くない。その意味で読者の想定を誤っていると思うからだ。まして、「英文だから内容の正確な評価はできない」として、しかるべき審査をすることなく企画化する、という態度は決して取ってはならない。場合によっては、手痛い失敗を招くこともあり得るのだ。「標準的」な学説では、間違いはないがつまらない。したがって、出

版企画にはある種「意欲的・挑戦的」な内容が求められるのだが、その域を超えて、「珍説」「異説」となると、著者のみならず、企画を採択した側に批判が及ぶ。

いずれにせよ、著者側の企画提案に出版部自身が的確な評価を加えられるようにしなければ、こうした基準は意味をなさない。審査体制の強化はもちろん、COEや科研特定領域などの大型研究の動向に注意したり、日頃から各種の学術レビュー誌に目を通すなど、企画力の向上を抜きにして、英文書の出版を引き受けるわけにはいかないのだ。

編集と英文校閲をどう進めるか

いくら世界に向かって刊行するに相応しい研究であっても、その論文を右から左へと印刷製本して出版するわけにはいかない。実は、本稿の基になるレポート[2]を作成する準備として、大学出版部協会の加盟出版部にアンケートをとったが、その回答の中で、「校閲は著者責任」とする出版部が少なからず見られた。極端なものでは、「版下原稿の作成まで著者の責任になっている」という回答もあった。

しかし、和書の場合を省みればわかるように、可読性という点でも、場合によっては叙述の正確さという点でも、著者の原稿がすべてそのまま刊行にたえられるわけではない。霊長類学者の原稿に「チンパンジーからヒトへの人類進化……」などという一言が紛れ込むことだって、現実にあるのだ。精密さを要求される本論から離れた部分には、時としてこうしたラフな記述が忍び込むものだ。そうでなくとも、言葉のセンスが問われるのが出版だ。日本で発行される数少ない権威ある国際学術誌の一つ、*Progress*（理論物理学刊行会）の校閲者を長く務めているG・パケット氏によれば、正確さを要求される論文英語において、日本人の英文は、about や agree、change や common とかいった、ごく「基本的」な語の用法に問題があるそうだ。たとえば、These cross sections are all about the same. という文章のどこに学術論文としての問題があるか、指摘できる日本人は少ないだろう。しかしその結果として、投稿した論文がリジェクトされ、ひどいときには研究のプライオリティを侵されることさえあり得るという。引用され得る学術書をつくるためには、語感や印象へも配慮した査読・校閲は不可欠なのだ。

私たちはこの点で、メルボルンにある学術出版社 Trans Pacific Press と提携を結んだ。同社は、現地の大学で社会学部長を務められた日本人（杉本良夫氏　本誌読者にはご存じの方も多いだろう）が、主として日本人社会学者の優れた仕事を英文で刊行するために、自前で立ち上げた出版社である。査読・校閲スタッフとしては、tutor クラスの若手研究者を何名も組織している。同社に校閲を依頼した原稿は、いずれも英文は端から「真っ赤」に朱入れされ、記述内容へのコメントや質問は一書目で百項目以上にわたる。ここまですれば、和書と同等レベルの編集はできた、

と評価できるだろう。

こうした編集を経て刊行された二〇〇二年一月以降の刊行物の販売状況を見ると、いずれも刊行後一年を経ずして初版部数の過半数を売りきっている。海外販売分は原価ぎりぎりまでディスカウントを要求されるとはいえ、英文書販売ではほとんど返本がないから、実売である。いずれも科学研究費等の出版助成を受けており、大学出版部のスタッフならお察しのとおり、すでに採算分岐を超えている。

事は和書出版にも通底する
――大学出版部の「集約点」としての英文出版

紙幅の関係で上記の販売をどのように進めたか、詳しく紹介することはできないが、海外市場に関しては、Trans Pacific Pressを通じて各地のホールセラーと結びついている。私たち京都大学学術出版会は、ここ数年間、年間刊行点数（三〇～四〇点ほど）の約一割を英文書に当ててきた。その点、日本の大学出版部の中で、現時点ではもっとも積極的に英文書出版に取り組んでいると自ら信じるし、前述した各企画分野に対応したいくつかの既刊書は海外で高い評価を得、中には版を重ねることができたものもある。

英文書の販売についてはここでは触れることができなかった。だが、少なくとも、企画・編集を十全に行えば、販売チャネルをそれぞれに用意することで（もちろん和書ほどではないにせよ）とにかく採算のとれるまでの販売実績を上げることができることは、確信してよい。

勘の良い方なら、ここまで読み進められて、すでにお気づきになったに違いない。そう、実は英文書も和書も、企画・編集の要点は全く同じなのだ。販売面では、確かに和書と違った努力や工夫もいるが、それでも再販制の見直しや返本問題がクローズアップされている今、取り組まねばならない問題は、本質的には同じである（この点では、先に『大学出版』誌上で紹介された東海大学出版会の経験は、大いに参考になる）[3]。

「真に評価され得る成果公開」の機能を果たせるか。大学の設置形態が大きく変わり、もちろんそれが、大学の存在意義の再構築を必要とする今、大学出版部はまさに存在意義を問われている。英文書出版は、私たちの取り組むべき問題の収束点にあるのではないだろうか。

（1）国内での英文書出版についてはそもそも統計もないが、日本書籍総目録と各出版社のWEBサイト等に基づいて推定すると、二〇〇一年度一年間で六〇書目程度と思われ、これは総点数（七万一〇七三）の〇・〇八％に過ぎない。しかも、その多くは日本紹介書や海事・医事等の日本の法令集であり、研究書といえるものは、おそらく大学出版部の一四点のみと思われる。しかし、この数も、大学出版部全体の刊行点数（七七五）の一・八％である。

（2）大学出版部協会二〇〇二年度夏期研修会（刊行助成部会）への報告「大学出版と英（欧）文図書出版」（二〇〇二年八月二三日）。

（3）三浦義博「出版社によるオンライン販売」『大学出版』五二号、二〇〇二年三月。

■ 科学する目 9

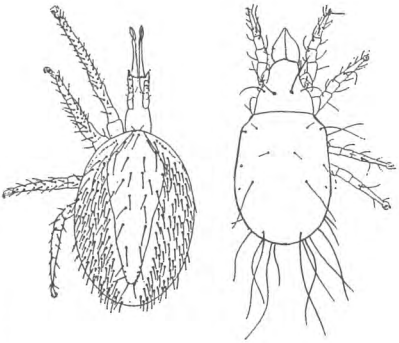
住居の変化と家庭害虫

青木 淳一

日本人の住居は大きく様変わりし、欧米の住居の形に近づいた。外壁はコンクリートかモルタルになり、窓はアルミサッシでピッタリと閉められる。居室や食堂は椅子・テーブルを用い、寝床はベッドになった。便所も汲み取り式から水洗になった。

このような変化は、当然のことながら、家屋内に生息する害虫の種組成をも変化させた。まず、便壷から発生するハエやアブが激減した。その結果、昔はどの家庭にでもあった蝿たたき、天井からぶら下がっていた蝿取りリボン、食べ残しの食べ物を入れておく蝿帳(三方が金網になった四角い戸棚)などは姿を消した。近代的なアパートやマンションが多くなると、天井裏という構造がなくなり、そこに住み着いていたクマネズミもほとんどいなくなった。床下に木材を使うこともなくなったので、シロアリも減った。

その一方で、現在もなお住宅の中に住み続け、減るどころか、かえって増えたように見える害虫も多い。その代表格がゴキブリである。そもそもゴキブリは熱帯系の昆虫であるから、冬の寒さが苦手である。近年の家屋は暖房設備が整い、室内は冬でも暖かい。それまでは冬の寒さのせいで冬を越せなかった地方でもゴキブリが生き続けられるようになった。それでも家族が寝静まってしまう夜中に暖房を切ってしまえば、室温はかなり下がってしまう。それでもゴキブリはどんどん北へ分布域を広げ、ついに北海道にまで生息するようになった。それを可能にしたのは、私の推論では、家庭用冷蔵庫の普及であると考えている。なぜなら、すべての暖房を切っても、家の中でただ一ヶ所暖かい場所があり、それが冷蔵庫の裏側の放熱板のあるところなのである。近頃は生物の分布が北へ伸びてくると、なんでもかんでも地球温暖化のせいにしてしまうが、「冷蔵庫のせい」というのもあるのである。地球温暖化は極地の氷を溶かし、全地球の海水面を上昇させる恐ろしい結果をもたらすであろうが、ゴキブリの分布を急激に北方へ伸ばすほど



右・ケナガコナダニ
左・イエダニ

の温度上昇をもたらしてはいない。

確かにハエは減ったが、カは一向に減っていない。昔は十月にでもなれば、もうカに刺されることはなくなった。しかし、今は十二月でも一月でも真冬にカに悩まされて眠れないことがある。これは町中の地下にある水のある施設、たとえば下水道などが整備されたからである。そこにはチカイエカ(地下家蚊)という亜種が出現し、地下の温かい水の中でボウフラが育つ。天井裏を好むクマネズミは減少したが、ドブネズミが増え続けているのも、地下施設のせいである。

最近とくに目立ちはじめ、騒がれているのは畳や絨毯にわくダニである。ほとんどがコナダニのなかまである。これらのダニは風通しが悪く、密閉されて湿度が高い環境が大好きである。その上、畳という食料があれば申し分ない。だから、コンクリートの建物で、窓がアルミサッシでビシリと閉まり、まったく欧米風かと思えば、さにあらずで畳が敷いてある。とくに建設直後でコンクリートに十分な水分が残っており、窓を閉め切って日光を入れず、栄養十分な新鮮な藁で編んだ畳が敷かれ、入居者を待っているようなマンションなどは、コナダニにとって絶好な住家であり、人間よりも一足先にダニが入居していたって不思議ではない。欧米式住宅と畳の奇妙な和洋折衷がダニの大発生を招いたのである。

風は入れるが、日差しと雨は入れない軒、庇、濡れ縁、障子、襖など、湿潤な日本の気候に見事に適合した建築様式。これを惜し気もなく捨て去ってしまった日本人の浅はかさに気づかなければいけない。

(神奈川県立生命の星・地球博物館)

日本民藝館

「民藝館の使命は美の標準の提示にある。その価値標準は『健康の美』『正常の美』にある。美の理念として之を超えるものはない。かかる一貫した美の目標の下に個々の品物を又全体を整理することは極めて重要な仕事と思はれる。云ふまでもなく、かかる標準を最初から理論で組立てるべきではなく、深く直感に根差すべきなのはもとよりである。（…略…）陳列はそれ自身一つの技藝であり創作であつて、出来得るなら民藝館全体が一つの作物となるやうに育てたいと思ふ。とかく美術館は冷たい静止的な陳列場に陥り易いのであるから、もつと親しく温い場所にしたいといつも念じてゐる。（初代館長　柳宗悦）」

中学生の頃に授業で接した記憶のある、民芸の心を説く柳宗悦の言葉が体現された日本民藝館が、新しく住むようになった街からわずかな距離にあることに、引っ越して二年も経ってからようやく気づいて、出かけてみた。

目黒区は駒場のうちでもこの一帯は、ほんの何百メートルか先を通る山手通や246号線の存在が信じられないほどの、閑静で陽射しのやわらかい街並みが、意識的に残されているようである。この住宅街の背後から東大先端科学研究センターの巨大で異様な建物がかなり唐突に現われる、その手前に日本民藝館はある。

木造二階建て漆喰塗の、倉のようにもみえる建物の入り口は、ガラスの入った大きな引き戸で、靴を脱いで上がったところもたたきと同じ石の床で、何かの道場のような緊張感が漂っている。しかし、展示室に入るとその気分は一変する。展示は二階から見るようになっている。二階には、大展示室のほかに、入り口の上の吹き抜けを囲んで四つの部屋と二つの廊下があって、企画展の展示の合間に、さりげなく常設の展示がはさみこまれている。このときの企画展は、棟方志功の特別展であった。日本美術界の巨人である棟方志功は、油絵から版画に転向して苦闘している時期に柳宗悦に見出されたことで、以後の巨大な足跡を記すに至ったのであり、このため、日本民藝館には棟方のもっとも充実していたころの作品

所在地　〒153-0041　東京都目黒区駒場4-3-33
京王井の頭線駒場東大前駅より徒歩5分
開館時間　10:00－17:00（入館は16:30まで）
休館日　毎週月曜日（ただし月曜が祝日の場合は開館し翌火曜休館）
年末年始、その他陳列替え準備のための臨時休館あり
入館料　一般　1000円（団体800円）
高・大生　500円（団体400円）
小・中生　200円（団体150円）
電話　03-3467-4527　ＦＡＸ　03-3467-4537

が収められているという。確かにその迫力は並大抵ではなく、棟方のあの、目を極度に近づけて体全体で彫る姿がありありと感じられるような、それでいて、自然を素直に見る無邪気な目が感じられるような、生き生きとした色であり、線であった。棟方の作品の多彩さ、多作ぶり、自由さは、もちろん彼自身の才能や信念の表れであるが、柳宗悦の民芸の思想――実用・複数・労働・廉価・無銘・地方・伝統・他力・分業――つまり、「自分で出来る仕事などたかが知れている。本当のものは個人を越えたところにある」という考え方が与えた影響も大きく、版画（棟方は自分の仕事を板画とよぶ）への無心の傾倒を引き出したのではないだろうか。

企画展以外には、一階の三つの部屋を含めて、李朝の陶磁器をはじめとした工芸品、日本の古陶磁や日用品、柳とともに民芸運動を推進したバーナード・リーチ、河井寛次郎、濱田庄司らの作品、日本全国の染織品などが、目いっぱいに、しかしさりげなく並べられていて、見飽きない。冒頭に引いた柳の言葉どおり、展示自体がひとつの見せ所になっていて、各部屋ごとにイメージができあがっていくのだが、それがまったく押しつけがましくないのである。詰め込み過ぎでもなく、もったいぶった「間」もなく、次は何が出てくるのかと楽しみにしながら歩ける。ただし、一階のミュージアムショップ――絵はがきやカタログや関連書籍のみならず、織物や染め物、陶器やガラスの作品、アジアの民芸品などが並んでおり、担当の方は、尋ねれば親切にいろいろ教えてくれる――にたどり着くころには、たった七部屋を回っただけとは思えないほど、足が疲れ切っていることは保証付きである……。企画展はもちろんであるが、李朝の作品のいくつかを見られただけでも、また、沖縄の紅型や東北の絣の数々を見られただけでも、千円の入場料は高くない。日常から生まれた美、是非一度ご堪能を。

（慶應義塾大学出版会・村山夏子）

大学出版部ニュース

▼大学出版部協会臨時総会開催

二〇〇二年一二月六日、東海大学校友会館霞の間において、大学出版部協会臨時総会が開催された。出席会員＝正会員一八校、準会員三校、委任状提出三校。以下三件の総会議案が提出され、満場一致により可決された。

第一号議案　会則及び運用細則の改定に関する件。

現行の会員資格を変更し、「会員は、当該大学がそれと認めた出版部及びこれに準ずる学術出版団体とする。会員は、出版活動の継続、もしくはその意志の継続を要する。会員は、協会活動への参加、もしくはその意志を要する。会員は、入会金・会費及び活動に伴う諸経費の応分の負担を要する。」とした。これに伴い従来の正会員・準会員の区別を無くし「会員」に統一した。また、名称についても国際交流の際の整合性から『日本大学出版部協会』（英文標記 The Association of Japanese University Presses＝略称AJUP）と称することとした。

第二号議案　幹事会のもとにおける、部会・委員会体制の変更に関する件。

効果的・効率的な協会の運営を目的とし、現行の部会・委員会体制を以下のように変更することとした。

① 幹事会に新たに事務局を設置し、事務局長を置くこと。

② 部会を編集、営業、国際、ＩＴ（仮称）の四部会制に変更する。

第三号議案　二〇〇三年度臨時賦課会費の徴収に関する件。

二〇〇三年に大学出版部協会が迎える創立四〇周年記念事業経費の一部を賄うために、加盟出版部に臨時賦課会費を課すこととした。

▼二〇〇二年度年末例会・懇親会開催

臨時総会と同日・同所にて大学出版部協会年末例会・懇親会が開催され、未加盟校を含め、二十一校七十三名が出席した（当番校＝聖学院大学出版会）。

懇親会では、臨時総会での議決内容、四〇周年記念行事に関する説明、各部会の活動状況等の発表が行われた。

▼第二一回編集者の集い開催

「大学出版部に望むこと―大学というブランドの活用と相互作用」をテーマに、小林哲夫氏（朝日新聞社「大学ランキング」編集統括）を講師に迎え、「編集者の集い」が開催された（二〇〇二年一一月一四日、東京電機大学神田校舎）。

大学出版部は一般からどのように認知され、何を期待されているのか。また、当該大学が存在することの強みをいかに活用すべきかなどについて、外から見た意見・提言を率直に述べていただいた。

北海道大学図書刊行会

▼中野繁著『**川と森の生態学**』（A5判・六〇〇〇円）　僅か三七年で人生を駆け抜けていった著者の、国際的に高い評価を受けている独創的研究の成果集。すぐれた研究プロセスを知るための一冊。

▼宮本謙介著『**アジア開発最前線の労働市場**』（A5判・六〇〇〇円）　産業構造と労働力配置の再編が急速に進展する新興開発拠点七地域を事例として、日系多国籍企業を中心に、個別労働市場の再編過程を分析し、その国際比較を試みる。

▼酒井昭著『**植物の耐寒戦略**』（四六判・二四〇〇円）　樹木はどれくらいの寒さに耐えられるのか、なぜ凍っても生きられるのか。植物の寒さに対する高い適応能力と多様な生存戦略について解き明かす。

▼辻井達一・岡田操著『**写真集　北海道の湿原**』（B4変型・一八〇〇〇円）　日本の湿原の八〇％が集中する北海道。航空写真を主体とした三〇〇枚を超えるカラー写真の迫力は見る者を圧倒する。

▼辻井達一・橘ヒサ子編著『**北海道の湿原と植物**』（四六判・二八〇〇円）　五一の湿原と湿原植物四一六種を六〇〇枚のカラー写真で紹介したフィールドガイド。

聖学院大学出版会

▼ジョン・ミルトン著、新井明・野呂有子訳『**イングランド国民のための第一、第二弁護論**』（近刊）

イギリス革命期に国王チャールズ一世を処刑したイングランド国民に対して、フランスの学者、サルマシウスなど国王派は、「王権神授説」を掲げ、イングランド国民を非難する文書を出した。これに対して、ジョン・ミルトンは「国王といえど、暴君であれば国民に服従の義務がない」ことを主張し、イングランド国民を弁護した。ミルトンの論拠は神の賜物としての「理性」を用いて、「統治形態と為政者」を選び取り、国王という名の為政者が暴政に走った場合にはこれを廃位し裁き、罰する「自由」が与えられている、というものであった。

ミルトンのこの「神の賜物としての理性と自由」の理念は、ジョン・ロックに継承され、名誉革命、アメリカ独立宣言、など現代まで脈々と流れる思想となったのである。本書は、ラテン語原文から翻訳され、訳注・解説によって、その思想を現代において理解できるように便宜が図られている。

麗澤大学出版会

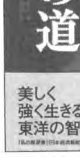
▼諸橋轍次著『**誠は天の道【東洋道徳講話】**』（四六判上製・一五〇〇円）

本書は文化勲章を受章した著者晩年の講演録の復刻版であるが、いま読んでも現代日本の病弊（モラルの低下）を癒す良薬のごとく心に響いてくる。

著者は、儒学の普遍的原理に基づき、人間が美しく強く生きるための目標とその実現法を明解でわかりやすい言葉で説いている。日経連載「私の履歴書」収載。

▼蜷川譲著『**パリの宿―日仏文化交流史試論**』（四六判上製・二五〇〇円）

日本の近・現代の歴史は、外国文化の咀嚼・吸収の上に築かれてきたといってもいい側面をもつ。著者は、その典型例として「日仏の文化交流」を取り上げる。第一章・パリの宿、第二章・日仏文化交流史上のロマン・ロランとアンドレ・マルロー、第三章・フランス陶芸紀行。



『誠は天の道』
本体1,500円（税別）

慶應義塾大学出版会

▼佐谷眞木人著**『平家物語から浄瑠璃へ―敦盛説話の変容』**（四〇〇〇円）『平家物語』の古典芸能への受容の経緯を初めて検証した意欲的研究。

▼庭田範秋監修**『新世紀の保険』**（三〇〇〇円）現代保険業が挑戦すべき課題について、研究者と実務家が様々な角度から分析し、積極的に提言を試みる論文集。

▼高田朝子著**『危機対応のエフィカシー・マネジメント―「チーム効力感」がカギを握る』**（一八〇〇円）新しいリスク・マネジメントの理論と方法を提言。

▼河野哲也著**『レポート・論文の書き方入門 第3版』**（一〇〇〇円）。インターネットでの資料検索方法や、情報倫理問題、ネット上の著作権の扱いなどを増補。

▼巽孝之著**『アメリカ文学史―駆動する物語の時空間』**（二四〇〇円）米文学史をロード・ナラティヴとして読み直すという全く新しい文学史テキスト。詳細な年表、コラムなど入門者向け資料も満載。

▼服部禮次郎編**『福澤諭吉著作集11 福翁百話』**（三二〇〇円）円熟期を迎えた福澤が、知友との対話の記憶を辿りながら縦横無尽、明快闊達に記した随筆集。

産能大学出版部

▼産能大学出版部編**『現代ビジネスハンドブック』**（一五〇〇円）

ビジネスマンが仕事を進めるうえで欠かせない言葉である「会社語」を集め、その基礎概念が捉えられるように、コンパクトな用語集としてまとめました。社会人の一般常識として、経営・マネジメントを学ぶ学生諸君がよりスムーズに勉学を進めるための必携書。

▼会社語研究会編**『現代会社語ハンドブック』**（一五〇〇円）

業務や人間関係を円滑に進めるためのビジネスの常識が満載。

☆新入社員：各部門がどんな仕事をしているかを知りたいとき、全部門を概略的理解できます。

☆中堅社員：他部門との打ち合わせや会議に出席すると、いろいろな専門用語が出てきます。そのようなとき常識的に理解しておいた方がよい基礎用語が習得できます。

本書で知識を確認し実践すれば、自信を持って生き生きとしたビジネスライフがおくれます。

専修大学出版局

▼ピエール・スイリ／西川正雄／近江吉明監修**『歴史におけるデモクラシーと集会』**（二八〇〇円）

時代や地域を越えて多様な「集会」「会合」を検証。従来「民主主義」としてイメージされてきた西欧起源の民主主義を相対化しつつ、民主主義を再検討し、その新たな可能性を問う。フランス革命期の議会、日本中世社会における惣村、エチオピア・オチョロの集会など。

▼古城正佳**『米沢藩刑法』**（六八〇〇円）米沢藩の刑事判例集に収録された七八〇〇件に及ぶ判例など膨大な史料を精査。刑罰の身分別適用の実態、乱心者への刑事責任能力の問い方などを江戸時代全般を通じて多角的に解明する。

▼雷新軍**『日本の経済発展における政府の役割―産業政策の展開過程の分析―』**（五六〇〇円）

▼陳振雄**『台湾の経済発展と政府の役割―いわゆる「アジアNIES論」を超えて―』**（四五〇〇円）

▼専修大学今村法律研究室編**『今村力三郎訴訟記録32 大逆事件㈢』**（四一七五円）

玉川大学出版部

▼小原國芳著／D・トレルファ訳／小原芳明監修／全人教育研究所編『Kuniyoshi Obara's Theory of Zenjin Education』（一六〇〇円）玉川学園を創立し、九〇年の一生を教育一筋に捧げた小原國芳。教育書のバイブルとして高い評価を得ている主著『全人教育論』の英日対訳版。

▼L・キーグ、M・ワガナー著／高橋靖直訳『**大学教員「教育評価」ハンドブック**』（二八〇〇円）大学教育の改善のために、教員が協力して評価をする、これが本書の中心テーマであり、「形成同僚評価」の具体的なプログラムを提示。

▼M・サンダーソン著／安原義仁訳『**イギリスの大学改革 1809-1914**』（二九〇〇円）現代の高等教育システムに直接連なる変化の歩みを、理念、教会や国家、産業界との関係、中等教育との接続、社会階層などの観点から概観する。

▼F・ルドルフ著／阿部美哉・阿部温子訳『**アメリカ大学史**』（五五〇〇円）両親に代って紳士を育てるカレッジと、学術研究、専門職教育等を推進するユニヴァーシティーの二形態に分けられるアメリカの大学の歴史を通観した古典的名著。

中央大学出版部

▼茅野信行著『**アメリカの穀物輸出と穀物メジャーの成長**』（二七〇〇円）穀物メジャー（大手穀物商社）は価格をつり上げられるのか？　穀物メジャーの生き残り戦術とは？　業界屈指の穀物トレーダーが、国際穀物事業の舞台裏を明かしつつ輸出事業の本質に迫る一冊。

▼中央大学大学院総合政策研究科日本論委員会編『**日本論Ⅱ―政策と文化の融合**』（二七〇〇円）日本型経済システム、日本人の国際感覚、日本独特の社会観念等さまざまな分野について過去を鑑としながら、混迷する現代日本を分析する。

▼建部正義編著『**21世紀の金融システム**』（二八〇〇円）現代資本主義の性格の解明、金融規制に関わる広範な課題、エコマネーなどを題材として、タイトルどおり、「21世紀の金融システム」のあり方を体系的に指し示す。

▼渡邊浩司著『**クレチアン・ド・トロワ研究序説―修辞学的研究から神話学的研究へ**』（四五〇〇円）「アーサー王物語」の実質的な創始者であり、12世紀ルネサンスを体現する西欧中世最大の物語作家を扱った本邦初の モノグラフィー。

東海大学出版会

日本の大学で学ぶ留学生を読者対象として、日本語学習および基礎科目の教科書を刊行してきた。二〇〇二年度より日本の大学への留学を希望する外国人留学生を対象とした「日本留学試験」が実施されている。そのシラバスに準拠した留学生向けの新しい教科書を刊行する。専門用語には中国語・英語の対訳つき。

▼『**日本の大学をめざす人の生物学**』東海大学留学生教育センター編　谷晋・伴野英雄・小田隆治著／A5判／二二四頁（予）／本体価格二八〇〇円（予）

▼『**日本の大学をめざす人の物理学**』東海大学留学生教育センター編　小西久也・南里憲三著／A5判／二二四頁（予）／本体価格二八〇〇円（予）

日本で学ぶ留学生のための既刊書は以下の通り。▼『新装版　日本語初級』Ⅰ・Ⅱ▼『日本語初級　文法説明』Ⅰ・Ⅱ　中国語版／英語版／韓国語版▼『日本語中級Ⅰ　用例集』▼『日本語　口頭発表と討論の技術』▼『留学生の数学Ⅰ』▼『留学生の数学Ⅱ』▼『留学生の物理学』▼『留学生の化学』＊いずれも東海大学留学生教育センター編。

東京大学出版会

いまヨーロッパの文化状況を読む新刊。▼**小坂井敏晶『民族という虚構』**（三二〇〇円）。フランスで活躍する著者は「共同体意識」がマイノリティを媒介に生成されたものであることを社会心理学的に分析、なぜこの虚構はかくも堅固なのかを徹底的に考え、「開かれた共同体概念」を試論する。▼**東京大学教養学部ドイツ語部会編『Prismen』**（「プリスメン」／テキストのみ一九〇〇円、CDつき三〇〇〇円）は、「ドイツ語学習から他者理解へ」とつなぐ教材。多和田葉子（ドイツ語作家）の小説などに現代のドイツの文化状況を読んでゆく。本書にも文章が収録されている、コミュニケーション・メディア研究者の▼**ノルベルト・ボルツ『世界コミュニケーション』**（三八〇〇円）では、いまや世界そのものにとってかわったコミュニケーション空間に登場するあらゆるもの――サッカーへの熱狂、ブランド、ニューエコノミー……に対して考察が繰り広げられる。そしてその行間にルーマン、ハーバマースらドイツ現代思想にたいするもっとも深い洞察がのぞく。

東京電機大学出版局

「バイオメカニズム」とは、人間を含む生物の形態・運動・情報および機能との関係を、工学や医学・生物学などのさまざまな方法論で解析し、その応用を図る学問分野である。小局では「バイオメカニズム・ライブラリー」（バイオメカニズム学会編）として、次の二点を新たに刊行した。

▼小川鑛一著**『人と物の動きの計測技術―ひずみゲージとその応用―』**（一四四頁・二五〇〇円）ひずみゲージを用いた力・圧力・加速度などの計測は、工学の分野ではごく日常的なものであるが、医学分野での活用事例は少ない。これらの使用法から、おもに人の動作を計測する応用例を平易に解説。

▼小川鑛一他著**『看護動作のエビデンス』**（一七八頁・二五〇〇円）看護・介助の動作については、従前から経験則に頼ってきたところが大きい。この動作について、工学的な根拠に基づいた有効性や活用事例を解説。

既刊▼赤澤堅造著**『生体情報工学』**（一七八頁・二五〇〇円）生体機能の知識と工学との関連を平易に解説。

東京農業大学出版会

〈シリーズ・実学の森〉

▼**『真・情報学―未来を学ぶ―』**東京情報大学「真・情報学―未来を学ぶ―」編集委員会編

ますます進化を遂げるIT（情報技術）の華やかな側面が強調される中で、具体的解決が急がれる環境破壊（ENVIRONMENT）についての取り組みを情報をキーワードに平易に解説したもの。

平成一四年十一月／B六判

一八二頁／本体価格一〇〇〇円

〈シリーズ・実学の森〉

▼**『ミセス・ファーマーの挑戦―女性起業家の夢と活力―』**田辺正宜著

著者の妻、田辺美代子さんは、女性ビジネスのトップランナーの一人。熊本県八代市でハーブと花苗の生産販売を営む。日進温室組合・花苗育苗センター所長として、「私がやるのだ」という強い意志と、謙虚な学ぶ姿勢がミセス・ファーマーのマネジメントの基本にあることが本書で読み取れる。特に女性起業家、男女共同参画などについて参考になる。

平成一五年一月刊／B六判

一七八頁／本体価格一二〇〇円

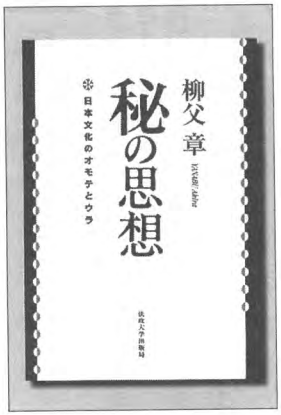
法政大学出版局

▼柳父章著…四六判・上製／二五〇〇円

『秘の思想――日本文化のオモテとウラ』

古代日本における舶来文物、とりわけ翻訳語としての漢字の受容のあり方が、「秘すれば花」（世阿弥）の〈秘〉の文化の原型となり、近世初頭のキリシタン禁制（宗門改め）において、差別や近代天皇制につながる秘の思想が日本文化の核として定着したとする斬新な日本文化論。翻訳＝異文化受容の問題に日本文化の秘密を解くカギがあると一貫して主張してきた著者の翻訳論の画期をなす最新著！

朝日新聞・清水克雄氏評（二〇〇二年一二月一五日）…古代から脈々と続く日本人の精神の型にこだわって社会の秘密に迫った、久々に歯切れのいい日本論だ。



放送大学教育振興会

平成十五年四月より開講する科目から主なものを紹介する。

▼学部開設科目

『計算科学』（杉本大一郎著）…理論と実験というこれまでの科学の方法に加えて、新しく台頭し今や主要な方法に成長した計算科学の現状とその意義を解説する。専門分野にとらわれない基幹科目の一つとして開設される。

『都市と人間』（倉沢進・香山寿夫編著）…人間活動の舞台である都市と人間の関わりの諸形態を考察するとともに、光と影に注目して問題点とその克服のための人間の努力に目を向ける。

『エネルギー工学と社会』（内山洋司著）…持続可能な成長を支えるためにはエネルギーの多様な供給と無駄のない消費が求められている。この科目ではさまざまな観点から将来のエネルギー問題を考察する。

▼大学院開設科目

『環境工学』（鈴木基之編著）…大気汚染や水質汚濁、地球温暖化、環境ホルモンなどの問題の解明と対応策について技術的・経済的・社会的に論じる。

明星大学出版部

中国語ブームなのか、平成四年に発刊の**『中国語基本用例辞典』**（明星大学中国語研究会編著　三五〇〇円）の照会が多いので再度紹介したい。語学学習には単語を調べるための辞書とともに用法を解説した参考書が必携となる。しかし、日本における中国語教育の歴史はかなり長いにも関わらず用法を中心とした参考書があまりに少ない。そんな声を受け、中国語の初級学習者が具体的な用法を容易に理解できるように初級の単語に限定して用例を中心に意味を記載し、発行したのが**『中国語基本用例辞典』**である。本書は動詞、補語の用法を詳しく文型から解説し、日中同型語の意味の対照のみならず、中国で使われている簡体語と日本の常用漢字との対照にも注意している。さらに中国語を学習する方達が困難としていた簡体語の筆順も問題字のみだが網羅されている。本書一冊で中国語の全学習段階に対応させようとするには掲載されている語句は少ないが、必要な初級語彙には触れているので辞書と併用すれば上級の学習にも十分対応でき、中国語を学習する方達に喜ばれている。

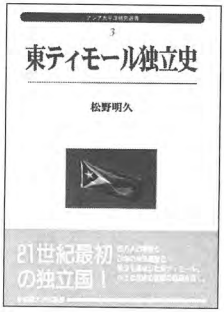
早稲田大学出版部

▼**『グローカル・ユニバーシティー早稲田大学の改革Ⅱ』**（奥島孝康／三八〇〇円）グローバル（地球的）であると同時にローカル（地域的）であること。斬新な構想が生んだ改革の成果の集大成。

▼**『公共の哲学』**（片岡寛光／三八〇〇円）公共性とは何か。プラトン、孔子、西田幾多郎を初め古今の東西思想を跡づけて、公共性の可能性を考察する。

▼**『ブランド要素の戦略論理』**（恩蔵直人・亀井昭宏編／二五〇〇円）トップ・ブランドのロゴ、キャラクター、パッケージ等を分析し、消費者の心をとらえるブランド要素とは何かを追求する。

▼**『東ティモール独立史』**（松野明久、アジア太平洋研究選書3／三二〇〇円）21世紀最初の独立はいかにして勝ち取られたか。小さな民族の苦難の軌跡を描く。



名古屋大学出版会

▼溝口常俊著**『日本近世・近代の畑作地域史研究』**（六五〇〇円）水田中心史観のもとで看過されてきた畑作の実態を初めて解明、その歴史的・空間的展開と日常生活の復元を通じ、近世の村落研究に再考迫る労作。

▼川合清隆著**『ルソーの啓蒙哲学　自然・社会・神』**（五八〇〇円）社会の自然的基礎を廃棄したとき、いかなる歴史が可能なのか。人間の内的自然（本性）と外的自然世界についての徹底した思考を軸に、その「哲学」を読み解く。

▼伊勢田哲治著**『疑似科学と科学の哲学』**（二八〇〇円）占星術、超能力研究、中国医学、創造科学……科学のようで科学でない「疑似科学」を通して、「科学とは何か」を解き明かしてゆくユニークかつ真っ当な科学哲学入門。

▼高柳哲也編**『介助犬を知る―肢体不自由者の自立のために』**（二八〇〇円）二〇〇二年五月に成立した身体障害者補助犬法で、初めて法的に位置づけがなされた介助犬。本書はその有効性や日本での現状と課題など、介助犬に関するあらゆる事柄を紹介する。

京都大学学術出版会

▼M・ベーゴン他著**『生態学』**（B5判一三〇〇頁・一二〇〇円）早急に問題を解くことがが求められるにもかかわらず、あまりに複雑なメカニズムに支配されている――それが生物の世界である。病害虫の防除、生物資源の管理・保全、汚染などの課題は、「何故ある種は普通で、別の種は稀なのか」「何故ある群は個体数が変動するのに、別の群は比較的一定に保たれているのか」「どのような理由で多様な種が同じ場所に共存できるのか？」といった、基礎的な問いと切り離しては解決できない。それを明らかにするのが生態学なのだ。今日まで積み上げられてきた理論と方法を残さず紹介しながら、最終的には、地球環境の保全にまで迫る、現代生態学の世界的な成書。

大阪経済法科大学出版部

▼【近刊予定】アジア研究所研究叢書9
『日清戦争と東アジアの政治』
戴逸、楊東梁、華　立　著／
華　立　監訳／岩田誠一ほか訳
日清戦争（甲午戦争）開戦（一八九四年）一〇〇周年を期して中国では、日清戦争を東アジアと国際情勢との関係で再検討する学術討論会やシンポジウムが各地で行われた。その成果の一つが原書『甲午戦争と東アジア政治』である。
一九世紀後半、他の地域が列強によって分割され、東アジアの各国は帝国主義の植民地となるか、自立出来るのか二つしかなかった。このような運命の岐路に日清戦争は勃発した。この戦争は西洋列強をも巻き込み、二〇世紀の東アジアおよび世界の歴史の進行に影響を与えた。
目次／一八六〇年から九〇年までの世界と東アジア／東アジアの対立の焦点となった朝鮮／日清戦争の勃発と列強の調停／中日講和会議と馬関条約の締結／「遼東半島還付」の三国干渉／日清戦争と台湾の割譲／日清戦争と中国近代社会／日清戦争後の日本／東アジアの国際関係の新局面

大阪大学出版会

▼柏木加代子著**『かきつばた―土田麦僊の愛と芸術―』**A5判・二二四頁・五七〇〇円　「舞妓の麦僊」として知られた日本画家の才能の開花を追う。天賦の画才と修行、渡欧、そして画家の創作意欲をかき立てる美しい娘との出会いへ。仏文学者が往復書簡を訳し、書き下ろした麦僊画論の真髄。
▼小林典子著**『ヤン・ファン・エイク―光と空気の絵画―』**A5・三八〇頁・七二〇〇円　ごく小さな画面に光あふれた豊かな空間を描写したヤンの完璧な技術―フランドル地域の「職人的経験」から生まれたという定説を覆した。
▼岡田禎之著**『現代英語の等位構造―その形式と意味機能―』**A5・三三六頁・六八〇〇円　もっとも基本的な接続詞andに関わる事例を中心に、さまざまな言語現象と意味機能の関わりを検証。海外専門誌にも掲載された水準の高い研究
▼新企画〈大阪大学新世紀レクチャー〉
高城敏美編著**『輸送現象論』**二〇〇〇円
▼〈大阪大学新世紀セミナー〉　杉原薫著**『アジア太平洋経済圏の興隆』**／小谷眞一他編著**『金融工学』**各巻一〇〇〇円

関西大学出版部

▼泉　澄一著**『対馬藩の研究』**（五〇〇〇円）対馬の研究に関わって三十年、藩政史料に通暁した著者が初期の藩政を明らかにし、宗家や御用商人などの実態に迫る。藩政史料のほか、『日野資勝卿記』『鹿苑日録』『慈性日記』『本光国師日記』などの史料を縦横に駆使し、数々の新知見を加えた書き下ろし論考。
▼乾　裕幸著**『俳句の本質』**（四二〇〇円）平成十二年九月に他界した近世俳諧研究者・乾　裕幸の最後の論文集。〈古俳諧と狂歌〉序説、滑稽―古典俳句の機構―、俳句解体新書、その他の論文十九編および対談等を収める。全体に『万葉集』の〈無心所着歌〉を源流とする俳諧ならびに俳句という文芸の本質を解明しようとする著者の一貫した研究姿勢が窺える。
▼井上泰山訳**『三国劇翻訳集』**（六七〇〇円）明代の宮廷内には豪華な舞台が建設され、慶祝行事の一環としてさまざまな演目が上演されていた。本書はそれらのうち、三国志関連の23作品を選び出し、宮廷秘蔵の上演用台本（内府本）に古版本も底本として全文を訳出した。巻末には詳細な解題も付す。全篇本邦初訳。

九州大学出版会

▼深川博史著**『市場開放下の韓国農業―農地問題と環境農業への取り組み―』**（A5判・四二八頁・六二〇〇円）九〇年代の韓国農業の実態を農地賃貸借問題に焦点を当てて、WTO体制への編入という対外政策変化との関連で農業政策を分析。日本生命財団研究成果発表助成図書。

▼萩島哲著**『都市風景画を読む―十九世紀ヨーロッパ印象派の都市景観―』**（B5判・一八六頁・四五〇〇円）印象派が描いた都市風景画の視点場を現地調査によって発見し、絵画、実景の写真、視点場の位置を示す地図を用いて、実景の構図の素晴らしさを分かりやすく示す。

▼九州大学政策評価研究会編著**『政策分析2002―九〇年代の軌跡と今後の展望―』**（B5判・三七〇頁・三八〇〇円）**『政策分析2000』『政策分析2001』**に続く三年継続の共同研究の成果。日本経済が直面する多様な政策的課題に対して総合的・多角的な評価を加える。

▼白石悌三著**『江戸俳諧史論考』**（四六判・三六〇頁・三八〇〇円・平成十三年十月刊）平成十四年度芭蕉翁顕彰会文部科学大臣奨励賞を受賞した。

東北大学出版会

▼大泉一貫著**『大衆消費社会の食料・農業・農村政策』**（A5判・並製・三五〇頁・三〇〇〇円）わが国の食料・農業問題は、食糧需要は十分あるのに農業の供給力がそれに伴わないことにある。農業が「大量生産・大量消費社会」の到来に後れをとったためである。現在は、資源浪費・大量流通に限界が見え、安全や新鮮・旬への関心の高まりが生じている。そのための供給構造やビジネスモデルの構築こそが必要であると説く。現代の農業問題を考える上での必読書。

▼「まなびの杜」編集委員会編**『まなびの杜〈東北大学〉知的探検のススメ』**（A5判・並製・二四八頁・一五〇〇円）『まなびの杜』は、多くの方々に東北大学を知っていただくために発行される季刊情報誌であるが、この本は、既刊号の内容を読みやすく再編集したものである。最先端の研究紹介や暮らしの中のなるほど学をはじめ、キャンパスや施設のガイドなど、バラエティ豊かな読み物をふんだんに盛り込んでいる。知的探検を楽しむ一助として、また東北大学をのぞく窓として、カラフルな本書をお薦めしたい。

流通経済大学出版会

▼佐伯弘治著**『運命との邂逅』**（二五〇〇円）著者は昭和四十九年から二十七年間、流通経済大学の学長を務め、同大学に自由と自立の学風を樹立した。現在は、それを設置する学校法人（日通学園）の学園長である。

この間、一学部一学科でスタートした小規模大学を四学部七学科、大学院三研究科（博士課程）、附属高校を擁するまでに育て上げた。

本書は、ここ十年間の著者の評論、随筆、講演などのうち、一般向けのものを撰んで編集した。内容は人物評や中国問題、武道論など多岐にわたっている。なお、日本の高等教育の制度的なあり様や大学改革に関する著者の提言については、かねて関係方面からの強い要請があったので、敢えてこれを採録した。また、流通経済大学の学生に贈った著者の言葉には、その人間観、教育観、歴史観が凝縮されており、いわば本書の要諦である。

本書は、著者のこの種の著作としては『明日を担うために』（昭和五十六年）『いま歴史の岐路に立って』（平成三年＝ともに桐原書店）に続く三冊目である。

三重大学出版会

■当会は、㈱三重大学出版会に組織替えしました。組織の名称表記、銀行口座、郵便口座の番号、名義人は従来通りです。■当会の会員は二九〇人ですが、全員を株主とする時は設立作業が煩瑣になりますので、設立発起人は武村泰男（前三重大学学長）一人とし、武村泰男が全株を所有するかたちで設立しました。■会社役員は、以下の三名です。代表取締役、武村泰男（前三重大学学長）、取締役、高橋忠之（前志摩観光ホテル総支配人）、林英哲（和太鼓奏者、英哲風雲の会主催者）。この三名のうち、高橋忠之、林英哲のお二人は当会の社外取締役になります。現代日本を代表する（マエストロ）お二人の見識や感覚が不可欠と考えて、特にお願いして就任していただきました。■当会は、今年度から「三重大学出版会奨励賞」を制定し、卒業論文、修士論文の表彰事業を行います。大学生が図書を読まない限り学術書の出版不況が続き、大学生が優れた卒業論文を書かない限り、大学の学術は衰退すると考えた上での表彰事業です。どうぞ、ご賛同、ご支援をお願いいたします。

関西学院大学出版会

新刊

▼田村和彦著**『魔法の山に登る―トーマス・マンと身体―』**（四六上製・三〇〇頁・定価二九〇〇円）身体・同性愛・青年運動・オカルト、そして戦争…戦間期ドイツを代表するトーマス・マンの小説『魔の山』を新たな視角から読み解く。

関西学院大学出版会

▼アマルティア・セン著　細見和志訳**『アイデンティティと理性』**（四六上製・一〇五頁・定価一八〇〇円）九八年にオックスフォード大学で行った講演録。訳者による解説付き

▼天野明弘著**『環境問題の考え方』**（四六並製・二〇〇頁・定価二〇〇〇円）環境問題全般を理解するための入門テキスト。

近刊

▼村田俊一著『Footpath & Highway』（英文）（A5変形・二〇〇頁・予価二二〇〇円）

▼大日向幻著**『イギリス諷刺詩』**（A5版・二五〇頁・予価三三〇〇円）

ウェブサイト委員会ニュース　http://www.ajup-net.com/

大学出版「メール・マガジン」を発行

▼大学出版部協会ウェブサイトは、開設五年を迎えようとしていますが、ますます大学出版部協会の広報の機能を果たすとともに、さらにウェブサイトの可能性を追究するサイトとして実験を試みます。そのひとつとして読者の方々に直接、大学出版部の書籍情報をお届けする「メール・マガジン」を発行しはじめました。各大学出版部の「新刊速報」を毎月、お届けします。協会ウェブサイトにてお申込みください。▼二〇〇三年、大学出版部協会は設立四〇年を迎えます。さまざまな記念行事を実施する予定ですが、ウェブサイト上で、「カタログ・ブックフェア」を開催することを検討しています。各大学出版部の「選りすぐりの書籍」を紹介します。ご期待ください。▼このウェブサイトでは、大学出版部協会の最新の動向、ニュースを伝えています。毎月、二十日あたりに更新しています。「幹事会からのメッセージ」「大学出版部ニュース」など、ウェブサイトだけでお伝えしている情報にご注目ください。▼ご意見・ご要望は、mail@ajup-net.com 宛にお願いします。

〈書籍の表示価格は税別です〉

大学出版人

「大学出版部の本性は大学にあるのか出版にあるのか」。現にある大学出版部の多様性を百も承知の上で、敢えてこのように問うてみよう。私の答えは「あらゆる多様性を越えてその本性は出版にあり」である。

出版とは、創造の果実である原稿を、右から左にではなく創造的に編集制作複製し、いくつかのチャネルを通して出来るだけ多くの読者へと、有償でお届けする、一連の商行為である。産業区分で言えば製造業だが一部直販等は小売業に含まれる。

研究教育の主体である大学と大学人が、右に記した一連の行為を自らの営みとして位置づけたときに、あるいは位置づけたいと願ったときに、大学出版部設立の道が開けてくる。この道は、実は二股に分かれている。頭部を大学内に業務の手足を大学外に置く道と両者を一体のものとして捉え大学出版人の養成から始めようとする道とである。歩み出せば共に大学出版部だが、時間と共に両者の軌跡は随分と異なってくる。

出版業は、製造業とは言いながら製造手段をほぼ完全に他業種に委ねている。それゆえに、頭部が大学内にあれば「出版は出来る」と思ってしまうのも、あながち間違いとは言えない。しかし継続的出版の本質的目標は、質の蓄積である。それを担保するのは人間である。大学出版部はそのような人間によって営まれる。それはただの大学人ではありえない、というところが問題なのである。

近年、いくつかのタイプの大学出版部が生まれかつ生まれんとしている。出版部作りにとって最大の問題は「目的」である。そしてその目的を理念的・経済的に支えようとする大学と大学人の意思である。しかし最も肝心なのは、目的を現実へと転化しうる大学出版人の存在である。

渡辺　勲
（東京大学出版会・大学出版部協会幹事長）

HITEはどこへ

「第六回 日・韓・中 大学出版部協会合同セミナー（ソウル開催）」の報告集、SEOUL 2002 TRIANGLE ADVENTURE を、つらつら読み返してみた。二〇〇一年の上海セミナーには私も参加しており、そこでは韓国・中国の電子出版に寄せる期待が熱く語られていた。しかし、二〇〇二年のセミナーでは、状況が変わってしまったようである。報告集を読むと、両国とも「はじけてしまったバブルには、もう興味がない」とでも言うのか、主眼は価格維持や出版経営に移ってしまったようだ。

実は、この訪韓団と時を同じくして、私もソウルの地を踏んでいた。訪韓団も私がソウルにいることは知っていたが、お互い会わない方が幸せということもあるので、漢江の南側に宿を取った。日本人は三人だったが、韓国の友人と一緒だったので、こちらは「TRIANGLE」ならぬ「BI-ANGLE ADVENTURE」である。

夕食時のこと、私が「まず、メクチュ（ビール）だね。HITE（ビールの銘柄）はないの？」と聞くと、「ああ、あれは廃れたみたいだよ。見掛けはするけど、今は CASS が人気あるね。」

私は一九九四年にも「日韓セミナー」参加のために訪韓したことがある。そのときもビールの話になり、韓国の方が「韓国では OB が主流だったけど、最近では HITE が人気あるよ。若い人はみな HITE ね。」

タバコも然りである。「八年前はパルパル（88）が売れていたけど…」と言うと、韓国の友人が「ムカシ売リマス。イマハ DUNHILL 多イ。」つまりこれも廃れたようである。

韓国・中国の電子出版も一時のブームに終わることのないように願いながら、HITE の泡を懐かしんでいる。

小野朋昭
（東海大学出版会・大学出版部協会編集部会長）

東京国際BF

営業部会では、毎月「新刊速報」を発行している。これは各出版部がその前月に刊行した新刊書籍を網羅したもので、図書館の選書ご担当や書店の仕入ご担当あてに、また、流通関係では書誌データの管理ご担当あてに配布し、お役立ていただいているものである。

このデータを一年分集計し、十進分類別・出版部別にまとめたものが、年度版の「新刊図書目録」である。これにさらに、大学出版部協会加盟二六出版部の最新出版目録を加え、函入りのセットにした「総合図書目録」（通称「合本目録」）が、毎年一月末から二月上旬にかけて作成される。合計重量が二・五キロを優に超える、この堂々たる目録セットは、選書・検索のためにたいへん有用である、との評価をいただいている。この文章が皆様の目に触れる頃には「二〇〇三年 総合図書目録」もできあがり、発送の運びとなっていることだろう。

協会加盟出版部が二〇〇二年に刊行した新刊書籍の総数は、七九七点であった。協会として活発な出版活動ができた、と自負しうる点数ではあるが、七〇〇〇点といわれる年間の新刊総点数のわずか一％を占めるにすぎない。それとて、「すべてを」「同時に」書店の店頭で見ることは不可能にちかい。

そこで営業部会では、協会設立四〇周年記念事業の一環として、四月に東京ビッグサイトで開催される「東京国際ブックフェア」に例年の二倍のブースを構え、謝恩フェアを行うこととした。新刊書・既刊書を豊富に取り揃えるとともに、特別テーマに沿った展示も計画している。合本目録も、もちろん入手可能です。是非お立ち寄りください。

山口雅己
（東京大学出版会・大学出版部協会営業部会長）

新しい一角

他社の話だが、「月曜社」という出版社が一昨年から本を出しはじめていて、いい仕事を続けている。デュットマン、ブランショの翻訳、森山大道の写真集…。HPにはスピヴァク、カッチャーリなどの近刊予告が並ぶ（http://biblia.hp.infoseek.co.jp/getsuyosha/）。出版不況にあって、こんなとんがった力が勝負しているのは、本当に嬉しい。

実は、大学出版部の数はここ数年で増加しており、出版業界では最近貴重な成長分野である。

もちろん、一般の出版社が学術書を出版しづらくなっていることが背景にあり、大学出版部はその「受け皿」である。だが、そんな消極的な言い方はしないで、「新興勢力」らしく、とんがった本を作りたいものだ。冒頭の新出版社のような存在は本当に刺激になる。

＊

前号まで『大学出版』の最後には、「製作の現場から」と「デジタル出版最前線」というコラムが連載されていました。楽しみにして下さった方も多かったと思います。二〇〇三年は、日本大学出版部協会が設立四〇周年を迎える年ですが、『大学出版』のこのスペースでは本号から「AJUPオピニオン」と題して、大学出版部協会の活動に携わるスタッフから、毎号交替で、その時々の大学出版・学術出版の話題、協会の活動、各大学の事情から、執筆者の身の回りのあれこれまで、自由なスタイルで執筆してゆきます。読者のみなさんには、「大学出版ってこういう思い・考えをもった人たちが携わっているんだな」と、現場の雰囲気を感じ取っていただければ幸いです。

後藤健介
（東京大学出版会・『大学出版』五六号編集）

大学出版部協会加盟出版部一覧

北海道大学図書刊行会
060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北海道大学構内
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

聖学院大学出版会
362-8585 上尾市戸崎1-1
TEL 048-725-9801 FAX 048-725-0324

麗澤大学出版会
277-8686 柏市光ヶ丘2-1-1
TEL 04-7173-3331 FAX 04-7173-3154

慶應義塾大学出版会
108-8346 港区三田2-19-30
TEL 03-3451-6926 FAX 03-3454-7029

産能大学出版部
158-0082 世田谷区等々力6-37-12
TEL 03-5760-7801 FAX 03-5760-7804

専修大学出版局
101-0051 千代田区神田神保町3-8-3 専修大学4号館
TEL 03-3263-4230 FAX 03-3263-4288

玉川大学出版部
194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

中央大学出版部
192-0393 八王子市東中野742-1
TEL 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354

東海大学出版会
151-0063 渋谷区富ヶ谷2-28-4 東海大学校舎内
TEL 03-5478-0891 FAX 03-5478-0870

東京大学出版会
113-8654 文京区本郷7-3-1 東京大学構内
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958

東京電機大学出版局
101-8457 千代田区神田錦町2-2
TEL 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563

東京農業大学出版会
156-8502 世田谷区桜丘1-1-1
TEL 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643

法政大学出版局
102-0073 千代田区九段北3-2-7
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

放送大学教育振興会
105-0001 港区虎ノ門1-14-1 郵政互助会琴平ビル3F
TEL 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482

明星大学出版部
191-8506 日野市程久保2-1-1
TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192

早稲田大学出版部
169-0071 新宿区戸塚町1-104-25
TEL-03-3203-1551 FAX 03-3207-0406

名古屋大学出版会
464-0814 名古屋市千種区不老町1名古屋大学構内
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

京都大学学術出版会
606-8305 京都市左京区吉田河原町15-9 京大会館内
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

大阪経済法科大学出版部
581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979

大阪大学出版会
565-0871 吹田市山田丘1-1 大阪大学事務局内
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1614

関西大学出版部
564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL 06-6368-1121 FAX 06-6389-5162

九州大学出版会
812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内
TEL 092-641-0515 FAX 092-641-0172

東北大学出版会（準会員）
980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 東北大学構内
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

流通経済大学出版会（準会員）
301-8555 龍ヶ崎市平畑120
TEL 0297-64-0001 FAX 0297-64-0011

三重大学出版会（準会員）
514-8507 津市上浜町1515 三重大学出版ホール内
TEL 059-232-1356 FAX 059-232-1356

関西学院大学出版会（準会員）
662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL 0798-53-5233（内線3475） FAX 0798-53-9592

大学出版 五六号（二〇〇三年春）二〇〇三年三月一日発行 頒価一〇〇円（〒共） 発行所＝大学出版部協会 ISSN 0913-3305
〒一一三―八六五四 東京都文京区本郷七―三―一 東大構内 東京大学出版会内 電話〇三（三八一二）二一一一（内線八七九五五） E-MAIL：mail@ajup-net.com URL：http://www.ajup-net.com/